

高度経済成長期への郷愁

公益委員 采女 博文

公益委員を拝命して、4年目に入った。労働相談や個別労働紛争のあっせんを担当する機会が増えるにつれ、なぜか昔の暮らしを思い出すことが増えた。来年の事を言うと鬼が笑う、という。昔の事を言うと、鬼が怒るかもしれない。昭和27年生まれで、高度経済成長期に学校生活を送り、第一次オイルショック(昭和48年)によるその終焉を見た。

この時代を明るい色で染め上げるのは、歴史的事実としては誤りである(昭和31年水俣病発見、昭和34年三井三池争議、昭和35年所得倍増計画、昭和38年三池炭鉱炭じん爆発)。でも、明るかった。明るくみえた。

フランク永井の「13,800円」という流行歌がある。昭和32年。石炭が黒いダイヤといわれていた頃の炭坑節である。「楽じゃないけど、13,800円、たまにや一杯飲めるじゃないか。…今日もとにかく無事だった。嫁をもらおうか、13,800円。贅沢言わなきゃ、食えるじゃないか。…明日は日曜、弁当もって、坊やゆこうぜ、動物園。…一家だんらん、13,800円。笑って暮らせばなんとかなるさ。…親子三人手をつなぎゃ、夢も結構わいてくる。」

でも、この頃、昭和33年、炭鉱での兄弟の暮らしを記録した10歳の少女の日記『にあんちゃん』(安本末子著)も出版され、ベストセラーになった。学校が希望であった。

流行歌の頃、わが家の暮らしは1万円を遙かに下回っていたらしい。それでも暮らせたのは、農家を離脱して1代目だったからだだろう。農繁期には労力の提供をしなければならないが、代わりに食料を調達できた。昔、「3ちゃん農業」という言葉があった。否定的なニュアンスで語られることが多いが、振り返ると、理想的な暮らしなのかもしれない。多世代同居の軋轢、人間関係の濃密さを必須とする地域社会であるが、何があっても生きることだけはできた。

昭和36年、老齢福祉年金制度が始まる。その頃、「長生きしたから、そのご褒美に国からお金が貰えるんよ」と言う祖母のにこにこ顔を思い出す。孫たちへの「えっへん」であった。無拠出年金であり、金額はわずかである。でも農山村では貴重な恵み、希望だった。

今、町で暮らす大部分の人は、農村から切り離されている。雇用・就労がなくなれば、即、生活が成り立たない。コンクリートの上の暮らしはもろい。逃げ込める農村、大地はもうない。何か食べたい物は?と聞かれて、ツクシとか芋の茎(最近、市場で売られているのを見た)とか答えると、会話は途切れるけど。雇用の安定は、昔より遙かに重要な施策になってきている。

労働者派遣法(昭和60年法律第88号)から、今、非正規雇用が広まってしまっている。政府も、法改正や各種助成金により、正規雇用への転換を図ってはいるが、さらに速度を速める必要がある。また、長時間労働が野放しにされるのでは、

普通の家庭の暮らしは成り立たないだろう。農村からの人口流失によって支えられた高度経済成長期、長時間労働や全国転勤を支える専業主婦という時代はすでに終わったのである。

太古の理想社会は、「日出でて耕作し、日入って休息する、井戸をうがって飲み、田を耕して食らう、帝力何ぞ我にあらんや」である。しかし、コンクリートに囲まれた社会を作った私たちは、「笑って暮らせばなんとかなる」雇用環境もまた「人為的に、意識的に」作る責務があろう。